

家庭動物と獣医学の関係史ー20世紀ドイツの例を通してー

Household Pets and Veterinarians in Twentieth Century Germany

慶應義塾大学 光田 達矢

Tatsuya Mitsuda, Keio University

キーワード： 獣医師 獣医療化 ドイツ 女性 多様化

keywords: Veterinarians Veterinization Women Diversification

1. 「獣医療化」の進む家庭動物社会

近年、日本のペット数の増加を反映して、動物診療施設の開設が目立つ。数年前に農林水産省が公開した統計をひもとくと、なかでも小動物診療施設の増加が顕著であることが判明する。犬や猫を主に扱う動物病院は、2005年の段階で9,482ヶ所全国に点在した。ところが、2010年になると、10,350ヶ所にまで膨れ上がり、現在も増加している。[1] 日本獣医師会は、2040年まで、犬や猫の診療回数は10%から20%伸びると予想し、将来的には1,600人から3,500人の獣医師が不足する事態に陥る可能性を指摘する。[2] アニコム損害保険をはじめとする動物保険の普及も今後順調に進めば、家庭動物を病院へ連れて行く頻度は間違いなく増え、獣医師の数とともに獣医学界の権力も呼応して増大する。今後、社会の「獣医療化」(veterinization)が進むのは必至だ。

近年、西洋を中心に、人文社会科学の分野では、科学や医学の持つ「権力性」に着目する研究が盛んだ。[3] ここ200年の歴史を見渡し、科学技術の進歩により人間の健康状態が大幅に向上したことを評価しつつも、科学者が世間に対して巨大な発言権を行使するに至っていると、「科学化」の負の側面を人文社会学者は明らかにしている。「新しい医学史」の領域は、「医療化」が進んだ結果、現在では医師と患者の力関係の不平等化が進んでいることも解明している。医学的知識は普遍的・客観的なものではなく、時代と社会に翻弄され変化するものなので、医学は絶対的ではなく不完全なものとして認識しなくてはならないという教訓を伝えている。

「新しい医学史」の影響を受け、獣医学史でも獣医師の持つ「権力性」に焦点を当てる研究が盛んになりつつある。[4] 本調査研究では、「新しい獣医学史」の問題意識を胸に、今後、社会の「獣医療化」が進むことによる弊害について歴史学の方法論を用い考察する。

家庭動物の正しい飼い方を指南する現場の1つとして動物病院は重要な空間なのは論をまたない。引き続き、科学的知識に基づき飼い主を導くことは極めて大切である。ところが、医師と患者の関係がそうであるように、動物病院を訪れる際、獣医師の見解を鵜呑みするような姿勢が飼い主側にあるとすれば、それこそ危険だ。高度な専門的な知識を同じように身につけ立ち向かうのは困難だが、たいじする獣医師が属する職業集団がどのような歴史を歩み、いかなる紆余曲折を経て家庭動物診療に携わるようになったのかを理解することは、獣医師とのより良い関係を構築するうえで重要だといえる。

本調査研究では、ドイツを事例として取り上げる。日本の獣医学はドイツの獣医学を手本とした過去を持つ。このため、両国の間に多くの類似点が見出せ、家庭動物と獣医学の関係史から教訓が得やすい。一方、アメリカやイギリスを対象とする研究では、「開業」を中心に両国の獣医学が発達してきた特徴が浮き彫りになっている。[5] この点、「国家」を中心に発達してきた日本とドイツの獣医学とは大きく異なる。アメリカやイギリスでは、獣医師は「動物医療市場」(marketplace for animal health)に自営者として参入することに抵抗感はなく、顧客を積極的に開拓するという姿勢が黎明期から見受けられた。一方ドイツでは、獣医師は国家の雇う

公務員として公衆衛生、家畜防疫、産業動物臨床にまず携わった。このため、獣医学の知識を営業目的で「売買」というスタイルに長い間、違和感が残った。その結果、家庭動物に目が向かうまでに相当の時間を要したことを、本調査研究では明らかにする。

2. 国家の発展と獣医学

日本の獣医学は、近代国家とともに発達した。[6] 明治維新以降、西洋の獣医学を輸入し、公衆衛生、家畜防疫、産業動物臨床を主とする3つの職域がいち早く確立した。肉食社会の促進、家畜産業の奨励、外国より「侵入」する感染症の防止のため、獣医師は不可欠な専門家集団として頭角を現した。陸軍の雇う馬医も加えると、獣医師は公務員として国家に仕えることを第一に組織された集団だったことがうかがえる。

ドイツの獣医学も似たような発展を遂げた。国家の雇う公務員として獣医師は19世紀初期にまず頭角を現す。[7]その後、19世紀中期に、開業獣医として自ら生計を立てるようになって行く。ただ、第1次世界大戦までは、馬の蹄鉄と診療が開業獣医師の収入の大半を占め、ペット診療による収入は微々たるものでしかなかった。農村部ではなく都市部に集中していたのも当時の開業獣医師の特色である。家畜動物保険が19世紀末に世に出ると、開業獣医は徐々に農村部へ進出するようになる。しかし、国家の派遣により家畜防疫員として長年従事してきた過去がここで影を落とす。牛疫が発生すると家畜の大量殺処分を命じる「汚れ役」を獣医師が担っていてからだ。このため、開業獣医師は農家や飼育者の信頼を得るのに苦労した。動物が発病してすぐ呼ばれるほどの信頼関係はなく、病が長期化し治療が困難の段階でようやく呼び出される。そのため、開業獣医師は科学的知識の優位性を示すことができず、顧客獲得は困難を極めた。農村社会では命を「救う」のではなく命を「殺す」専門家集団として長年揶揄されたのは示唆的で、家庭動物を扱うようになってからもしばらくこのレッテルはつきまとうことになる。

このような過去が影響して、ドイツの場合、開業獣医師が農業に本格参入するのは20世紀に突入してからになる。当時、ヨーロッパ各国を中心に、保護貿易が拡大していた。国内農業を保護する名目で、家畜の輸出入を厳しく規制する動きが活発だったのだ。この保護貿易を巡

り、農業と獣医師の利害が一致した。長い間、農業は獣医師による「介入」を嫌い、獣疫発生時のみしぶしぶ人員を受け入れる程度だった。非常事態でないときは家畜について最も詳しいのは飼育者だというスタンスを崩さなかった。ところが、1890年代以降、国内の畜産業者は安価な輸入に脅威を覚えるとともに外国へ輸出する畜産物の質の高さを証明する必要性から、厳しい獣検疫制度を自ら国家に求めるようになる。[8] 公設と畜場を中心に、食肉検査の標準化・義務化を当時目論んでいた獣医学界にとって、農業の姿勢軟化は獣医警察(Veterinärpolizei)の権限を広げるまたとないチャンスをもたらす。1900年に帝国食肉検査法は家畜全ての公衆衛生獣医師による検査を義務付けた。これを契機に開業獣医師の農業への進出が加速したのである。

3. 獣医学の危機と家庭動物

家庭動物がドイツの開業獣医師の視野に入るようになるのは、1950年代以降である。牛馬のような大動物から、犬や猫といった小動物への「転換」を余儀なくしたのは、職業を取り巻く3つの変化であった。[9] 1つは、自動車の台頭で、都市部のみならず、農村部においても労働力として大きな役割を担っていた馬が自動車に取って代わられる事態だ。この変化により診療回数は減り、開業獣医師の生活基盤を脅かした。1935年には、獣医師1人につき638頭の馬の面倒を見ていたのが、1953年になると、1人当たり274頭に減った。家畜のなかでも馬の減少率が最も深刻で、馬に大きく依存してきた伝統獣医学の構造問題が浮き彫りになる。2つは、畜産業の大型化に伴い、獣医師の需要が低下したことだ。1935年には、獣医師1人当たりが牛5014頭の診療を行っていたところ、1953年になると、2、342頭となり、数は半減した。馬ほどの減少率を記録しなかったものの、収入の目減りに拍車をかけた。3つは、獣医師による開業が進み、全国的に動物医療市場の競争が高まったことだ。Thieleによれば、1938年には全国で2、416ヶ所しかなかったのに対して、1953年には4、969ヶ所に数が膨れ上がった。開業が増加したのは、牛馬の需要低下と関係している。従来の牛馬依存体勢から脱却し、新たな市場を開拓する時代へ獣医学界が取り組み始めたのが1950年代だった。

しかし、大動物から小動物への「転換」は必然でも容易でもなかった。1950年代、家庭動物を扱うことに難色を示す獣医師は多かったからだ。[10] その理由は、家族が飼育する犬や猫を診療することが大きな収入になるとは思えないという考えだった。産業動物を診療するのに慣れきっていた獣医学界からすれば当然の反応で、牛をはじめとする大動物や、豚や鶏をはじめとする産業動物は大量に診療するので、それなりの収入を得ることができた。ところが、家庭動物に同じようなスケールメリットは期待できず、飼い主が大勢動物病院へ足を運んでくれるかどうかも未知数だった。このため、小動物診療へ舵を切ろうと提唱する獣医師は少数派でしかなかった。もちろん、犬や鳥をはじめ、小動物を診療するという習慣は近世からあった。[11] しかし、これらの動物は、狩猟を目的とした動物で、労働力として価値が高かった。そのため、獣医師を雇い治療を行うことには経済的なメリットを見出しやすかった。王侯貴族をはじめ、富裕層が所有するケースがほとんどだったので、高額な治療費を支払うだけの資金力も見込めた。一方、中間層が中心に飼うペットは、労働力としての価値はほとんどなく、ペットにどれだけ治療費を払う覚悟があるのか、当時の獣医学界では懐疑的な意見が相次いだ。

4. 家庭動物診療への「転換」

家庭動物と獣医の距離を遠ざけていた要因として、獣医学界内の地位問題も挙げなくてはならない。[12] 第2次世界大戦前、最も地位が高かったのは家畜防疫従事者で、難関な国家試験に合格し、政府の高官として働く公務員として君臨した。ドイツ帝国の最大州のプロイセンでは *Departementstierarzt* および *Kreistierarzt* と呼んだ。獣医学の黎明期に、身分と収入が安定しないなか、国家により家畜防疫を目的に1835年に正式につくられた獣医高官は、国家の後ろ盾をバックに、発言権を高めて行った。次に地位が高かったのは、食肉検査に従事する公衆衛生獣医師 (*Sanitätstierarzt*) で、1880年代以降、公設と畜場の建設を皮切りに、勢力を増して行った。獣医学界内の地位を高めたのは、顕微鏡を用いヒトへの感染症を予防する役割を担い、細菌学の高度な知識と技術が求められていたことに負う。一方、陸軍の雇う馬医や開業獣医は、高度な科学的見識は必要とされず、国家試験を受験

する必要もなかったので、下に見られがちだった。家庭動物を扱う獣医師がいたとしても、ほとんどの場合、開業獣医が担当していたため、ペット診療が高いステータスを得るような状況ではなかったのである。

このように、獣医学が1950年代に危機に直面しながら、家庭動物をすぐに歓迎しなかったのは、「個人」ではなく「国家」と関連の深い仕事に獣医師が従事しているのが原因として考えられる。その際、個人の飼い主の利害を優先するのではなく、公共の利益を優先するよう訓練がなされていたため、個人の所有する小動物を扱うことに抵抗感が残った。長い間、政府高官、医療従事者、地方自治体、農家など動物に関する知識を持つ専門家集団と日常的にたいじしていた状況から、科学的知識がほとんどない素人集団を相手に「商売」をする必要性から大きな戸惑いが生じたのである。

5. 女性獣医師の台頭と家庭動物診療

ドイツにおいて、戦後、家庭動物への「転換」を最も強烈に後押ししたのは、多くの女性が獣医師を志したことと関係している。[13] 上述したとおり、男性を中心とする獣医学界では、家庭動物への抵抗感は相当のものだった。大動物を扱うことこそが最大の使命であると主張する獣医師が多く、牛舎などで指示に従わない動物との「格闘」を制するには力強さが何よりも必要だという考え方を反映していた。このような過酷な現場に女性を投じるのは適切ではないとする立場が影響して、戦後、増えつつあった女性獣医師は大動物を扱う道はほぼ閉ざされ、力強さがそれほど求められない小動物診療へと流れたのである。もちろん、家庭動物だと、女性でも扱いやすく、家族を相手に仕事をするので、「女性らしさ」が発揮しやすいというもの、この流れを後押しした。こういう考えから、戦後、女性獣医師による家庭動物医療への進出が目立つようになった。2000年の段階で、ドイツ全国で毎年200ヶ所新しく開業があるが、そのうち180ヶ所は小動物診療を専門とする。[14] その多くには女性獣医師が働いているのは示唆的である。

家庭動物を担当する獣医師が女性を中心に1970年代増えていったとはいえ、獣医学全体では、依然として大動物への関心が高く、臨床など訓練が行われる獣医学校でも、小動物を扱うことは少なかったようだ。Hauser(1974)に

よれば、獣医学において小動物への関心があるとするならば、人獣共通感染症の危険性の有りが最も大きな基準となり、ペットオーナーの観点が欠落しがちだった。[15] 引き続き、1980年代、鳥への関心が高まったが、同じく、ヒトへの感染リスクが興味の根底にあり、家庭動物治療の現場とは乖離する研究が獣医学校でしばらく続いた。その結果、獣医師の診断はいい加減なものが目立ち、外的特徴を診ただけで判断が下されるほどであった。

もう1つ大きな問題として浮上したのが、1990年代以降、子どもが飼い主として台頭したことである。[16] 犬や猫のような高額動物ではなく、子どものお小遣いでも購入可能な小動物の数が増えたため、家庭動物診療では、さらに多様な動物を診療する知識と経験が必要となった。これらの小動物は、当然、獣医学校では大きな関心を集めることがなかったため、開業獣医は、不十分な診断しかできなかった。また、大人ではなく子どもを相手にしなくてはならない事態が起き、子ども相手にもわかりやすく説明する工夫が求められるようになった。

6. 結論

ドイツにおける家庭動物と獣医学の関係史を振り返ると、小動物診療は獣医学にとって比較的新しい職域であることが判明する。ハノーファー獣医学校の創立は1778年にまでさかのぼるので、その後、200年近く、小動物ではなく大動物が学術的関心を集め、動物医療市場でしごきを削る開業獣医師ではなく国家公務員として家畜防疫や公衆衛生に携わる獣医師が学界で最も力を持っていたことを意味する。獣医学界が1950年代に危機に直面しながら、家庭動物診療へ舵を大きく切るという判断をなかなか下さなかったのも、公務員として「金儲け」に走ることに意義を唱える獣医師が多かったことと、家庭動物診療がそもそも収益を上げるのかという疑問を持つ男性獣医師が多かったことと関係している。女性獣医師の台頭により、家庭動物診療が本格化するが、1980年代頃で、意外と遅いことが明らかとなった。

参考文献

1. 矢ヶ崎忠夫 (2012) 統計数学をみて思うこと. 日獣会誌 65, 74-74.
2. 日本獣医師会 (2008) 今後における獣医師需給と農林水産省の獣医師の需給に関する

検討報告書の公表 .
<http://nichiju.lin.gr.jp/report/190605-1.pdf>

3. Conrad, P. (2008), *The Medicalization of Society*, Johns Hopkins University Press.
4. Mishra, S. (2014), 'An introduction: veterinary history comes of age', *Social History of Medicine*,
http://www.oxfordjournals.org/our_journals/schis/veterinaryhistoryintro.pdf
5. Jones, S. (2003) *Valuing Animals: Veterinarians and their Patients in Modern America*, John Hopkins University Press.
6. 中村洋吉 (1980) 獣医学史. 養賢堂
7. Schmaltz, R. (1936) *Entwicklungsgeschichte des tierärztlichen Berufes und Standes in Deutschland*, Schoetz.
8. 'Entwurf eines Gesetzes betreffend die Schlachtvieh- und Fleischbeschau.' *Bericht über die Verhandlungen der 27. Plenar-Versammlung des deutschen Landwirtschaftsraths* (1899), 65-122.
9. Thiele, S. (2009), *Die gesunde Tierarztpraxis: Kundenorientierung und Positionierungsstrategien*, Enke.
10. Rheker, I. (2001), *Untersuchungen zur Bedeutung der Heimtiere in der tierärztlichen Fortbildung*, Dissertation, TIHO.
11. Drisesch, A. et al. (2003), *Geschichte der Tiermedizin. 5000 Jahre Tierheilkunde*, Schattauer.
12. Schmaltz, R. (1936) *Entwicklungsgeschichte des tierärztlichen Berufes und Standes in Deutschland*, Schoetz.
13. Maurer, B. A. (1998). *Frauen in der Tiermedizin*, Doctoral dissertation, Freie Universität Berlin.
14. Thiele, S. (2009), *Die gesunde Tierarztpraxis: Kundenorientierung und Positionierungsstrategien*, Enke.
15. Hauser, K.W. (1974), *Gedanken zur Fortbildung*, Prakt. Tierarzt 55.
16. Thiele, S. (2009), *Die gesunde Tierarztpraxis: Kundenorientierung und Positionierungsstrategien*, Enke.